

良寛詩集系統序論 (下)

— 二系統の流布本について —

下 田 祐 輔

はじめに

良寛は天保二年(一八三一)に七十四歳で遷化した。文化十年(一八一三)前後から、すでに彼の周辺では良寛詩集刊行の企てがあり、良寛自撰の詩集稿本を元とした、他撰の良寛詩集がいくつか成った。結局どれも刊行には及ばなかったのだが、そのうちの二種の詩集が次々に筆写されて流布していった。

この二種の流布本、鈴木本「草堂集」と草庵本(いわゆる「草庵集」)は、排列こそ全く異なるものの、その所収作品の多くが共通し、それらのテキストも殆ど同一であるといえる。前稿では、この流布本系テキストを、現存する自筆稿本諸本と比較検討した結果、最も推敲の進んだものであることが明らかとなった。従って、この流布本系テキストは良寛詩の解釈や評価の上で最も重視されるべきテキストの一端であることになる。

問題は、これら流布本の底本たる自筆稿本そのものが、今もなお伝存不明となっていることである。鈴木本・草庵本の伝えるテキストは、基本的には同一であるとしても、細かく見れば異同が存する。二系統の流布本のうち、良寛自筆稿本のテキストをより忠実に伝え

る、信頼度の高いテキストはどれなのだろうか。

従来、重要視されていたのは鈴木本の方であった。それは次のような事情によるであろう。まず、編者である桐軒・文台らが、良寛と親交のあった人としてよく知られていること。対して草庵本の編者については殆ど未詳である。次に鈴木本が自筆詩集稿本と同じ「草堂集」という題を冠しているために、注目度が高かったであろうこと。草庵本の方は、後述するように伝本によって題がさまざまである。更に、東郷豊治氏は、「草庵集」(草庵本)について「誤写や誤字が著しく目につく」とし、鈴木本のテキストを定稿、草庵本のそれは未定稿と位置づけ、鈴木本を信頼した上で、これを全集のテキストとして採用された。ここに草庵本の位置づけはほぼ決定的となった。以後、「草庵集」なる一系列の伝本は殆ど顧みられることのないように思われる。

しかしながら、改めて、この二種の流布本を比較してみると、この従来の位置づけには疑問が持たれてくる。草庵本のテキストは果して従來說の如く、鈴木本に比して信頼度の低いものなのだろうか。

一 草庵本伝本の再検討

東郷氏はいわゆる「草庵集」の伝本として、『良寛法師草庵集』（相馬御風旧蔵）と、『良寛師草庵集』（関西某氏蔵）の二本を挙げてゐる。その他にも「草庵集」と題する伝本には、文政五年小池世貞写と見られる『草庵集』の存在が知られるが、現所在未詳である。

しかしながら、他筆の写本によつて伝わる良寛詩集は、鈴木桐軒らの編んだ『草堂集』と、これら『草庵集』だけに留まらない。『草堂集』でもなく『草庵集』でもない題の写本がいくつも伝わっているのである。それらには「良寛禪師詩集」「良寛尊者詩集」など様々な題がつけられていて、一見別々に編まれた詩集の如くである。ところが、これら様々の題を冠した詩集の内容を検討すると、それらの内容は殆ど同一のものであり、更に、これらは「草庵集」と名付けられた詩集と、実は同じものであることが判明する。従つて、良寛詩集の写本による流布本は、従来の説通り、大きく二系統に分かたれることに変わりはないが、これまで下されていた、いわゆる「草庵集」に対する評価・位置づけは、「草庵集」とは題されていない右の如き諸伝本を加えた上で、再検討されるべきである。そこで、すでに述べたように、いわゆる「草庵集」と同一の内容をもつ諸伝本を「草庵本」、それに対し、鈴木桐軒らによつて編まれた「草堂集」の系統に属する諸伝本を「鈴木本」と呼ぶことにし、以下、検討して行くこととした。

ここで、現段階で知り得た草庵本系の伝本を筆写年次の古い順に掲げる。

1 『良寛禪師詩集（内題・尾題）』〔入卷町本〕 新潟県西蒲原郡巻町

郷土資料館蔵。桐原居士写。一七九首収載。*本書の正確な筆写時期は未詳であるものの、草庵本祖本の姿を最もよくとどめていると考えられる。後に詳述。

2 『草庵集（打付外題）』〔入小池本〕 現所在未詳。文政五年一月、小池世貞（推定）写。（3）

3 『沙門良寛師詩集（題簽）』良寛尊者詩集（内題）〔入阿部本〕 新潟県西蒲原郡分水町 阿部家蔵。文政七年七月写。一七九首収載。○「文政甲申初秋 北越渡部郷 藤原主人写之 米垂閑人」

4 『良寛尊者詩集（打付外題・内題）』〔入三康本〕 東京都港区 三康図書館蔵。天保四年十月、亀倉氏写。○「惟時天保四癸巳歲冬十月写之 亀倉氏藏書」

5 『良寛法師師庵詩集（内題）』〔入糸魚川本〕 糸魚川市歴史民俗資料館蔵（相馬御風旧蔵）。嘉永二年七月写。一八二首（三首追補）収載。○「嘉永西七月写之 塗抹」

6 『良寛師草庵集』関西某氏蔵。安政三年二月写。*東郷『良寛全集 下』による。

7 『良寛尊者詩集（打付外題・内題）』良寛禪師詩集（尾題）〔入牧江本〕 糸魚川市歴史民俗資料館蔵。慶応二年二月、牧江靖斎（推定）写。一七九首収載。○「慶応二丙寅仲春昼日写功 松蔵館收

江氏藏書」*牧江靖齋は阿部定珍の九男。

8 『良寛子詩集(題簽) 良寛詩集(内題)』 国立国会図書館(輪池叢書) 藏。明治四年二月写。一七〇首収載。○「香雨書屋珍藏」(奥書四行 略す。) 明治四年きさらぎ二十まり四日」

9 『良寛上人詩集(題簽) 良寛尊者詩集(内題)』(幸田本) 渡辺秀英氏藏(幸田家旧藏)。筆写時期・筆写者未詳。二〇一首収載。

10 『良寛詩抄(題簽) 良寛吟詠集(内題)』 糸魚川市歴史民俗資料館藏。筆写時期・筆写者未詳。一四六首収載。*本書は抄出本。

詩集題は一伝本内に於いてすら統一を欠くものがあるなど、かなりの揺れを呈しているが、概ね「草庵集」「良寛禪師詩集」「良寛尊者詩集」の三つが主となっている。但し、これらが如何なる関係になっているかは、なお検討を要する課題である。

二 草庵本の成立

現存の草庵本諸伝本の中で、最も古い年次の記載が見られる巻町本『良寛禪師詩集』に、草庵本成立の事情を伝える注意すべき記述がある。

まず、巻頭に「良寛禪師詩集」と題し、直ちに詩集本文が始まるが、その巻頭題の次の行に「高岡亭 翠柳軒」と記されている。巻末、最終丁ウラには、

(詩二行、略す)

總計二百八十二首

文化十二乙亥梅月日書之

良寛禪師詩集終

の如く書かれ、裏表紙見返しに、

良寛詩

詩集良寛禪師之秀逸撰集隱而

不知人卷之隱密放之弥六合意味乎

後覽者仰評

而已 善哉舎

桐原居士写之

逐加(詩一首、二行。良寛の作かどうか未詳。略す。)

と記されている。「文化十二乙亥梅月日書之」という日付は、詩集本文の終わりを示す「良寛禪師詩集終」よりも前、つまり詩集本文中にある。従って、この日付は、桐原居士が本書巻町本を筆写した時というより、むしろ「高岡亭翠柳」なる人が本書の祖本を「輯」し終った時を指しているかのように考えられる。

こうした記述は、現存諸伝本中、巻町本のみに見られるものであり、本書が草庵本祖本の姿を最もよくとどめていると推察される所である。

編者、高岡亭翠柳の伝記的事実は、現時点では未詳である。(?)

三 草庵本の構成・内容

草庵本にはいづれも、編者による序・跋等はない。左に示す如く、詩集本文は二部に分かれたれ、各々「古詩」「雑詩」と総題されている。「古詩」の部は題辭を有する五言七言の詩篇を七十一首、「雑詩」の部は題辭の無い五言の詩篇を百八首収める。

(つまり七言詩には総て何らかの題が付されている。)併せて全百七十九首を収める。この所収作品の大部分(古詩の部71首のうちの55首、雑詩の部108首のうちの92首)は『草堂詩集』と共通する。なお、卷町本・阿部本は、卷末に「総計一百八十二首」と記しているが、実際はやはり百七十九首しかない。

のちに増補本も作られている。三康本・幸田本・関西某氏蔵本(8)がそれである。これらは、文化十二年に草庵本の祖本が成ったのちの新作を含む約二十首を卷末に付け足している。

このように、有題詩と無題詩(雑詩)との二部構成をとり、しかも雑詩の部は五言の詩篇で統一するという編集方法は、良寛自撰詩集『草堂詩集』の編集方式と同じく、また有題詩の部が「円通寺」と題する詩に始まる点、雑詩の部が「我有一張琴」詩に始まり「誰謂我詩詩」詩に終わる点も『草堂詩集』と同じである。こうした構成の顕著な符合は、草庵本が良寛自撰詩集の一つを底本に用いて編

179	←	72	←	1	「古詩」
				円通寺	
				(五・七言の有題詩)	
			71	有感	
				「雑詩」	
				我有一張琴	
				(五言の無題詩)	
				孰謂我詩詩	

まれたことを明白にする。但し、草庵本の雑詩の部は詩句数別(十句以上・八句・六句・四句)に作品を纏めて排列しているが、こうした排列法は良寛自筆稿本には全く見られず、企図した跡も認められない。(9)従って草庵本は良寛自撰詩集をそのまま引き写したのではなく、その構成には編者の手が加わっていることが知られる。

また、草庵本の伝本にはいづれも訓点(返り点・送り仮名)が施されている。伝本によって若干の精粗の差はあるが、殆ど同じ訓みをしていることから、祖本に付けられていたものが、写本作成の際、ともども伝写されたものと考えられる。

四 鈴木本の成立と伝本

鈴木本は、越後国粟生津村(現西蒲原郡)に住み、良寛と親交深かった、鈴木桐軒・文台の兄弟及び桐軒の子順亭によって編集された良寛詩集であり、「草堂集」の題がつけられている。(10)

伝本は、①東郷豊治氏旧蔵本(安政五年 北越大曲村捧信賢写)、②国立国会図書館(鸚軒文庫)蔵本(題簽「良寛詩集 草堂集」筆写年次等不明)、③鈴木宗久氏旧蔵本(筆写年次等不明)、④長谷川良平氏蔵本(長谷川氏写 筆写年次不明)等がある、このうち、東郷本と鈴木宗久本の二本については、東郷本は東郷豊治編著『良寛全集』に、鈴木宗久本は西郡久吾編述『其詩傳入沙門良寛全伝』にそれぞれ収録されているが、原本そのままの翻刻というわけではなく、編者の改変や誤植も含まれている点、注意を要する。

これらの伝本は皆、文化十三年に文台が撰した序を有するが、このうち長谷川氏蔵本のみが他と収録作品数・排列など、体裁を異にしている。従来流布して知られているのは、長谷川氏蔵本以外の体

裁の方である。両者を較べ見ると、以下に詳述するように、鈴木本は、長谷川氏藏本に見る形に一旦編まれ、その増補改訂版が流布本となったことが知られる。そこで、長谷川氏藏本を第一次鈴木本、流布した形態のものを第二次鈴木本と仮に呼ぶことにする。

五 鈴木本の構成・内容

第一次鈴木本の構成（長谷川藏氏本）

各部の題など	所収詩篇の種類・数
<ul style="list-style-type: none"> ・「草堂集序」<small>（文台）撰</small> （末尾に「文化丙子（十三年）六月」） ・「付言」（末尾に「鈴木隆造（桐軒）識」） ・「草堂集卷之上／北越良寛禪師咏」 ・「草堂集卷之下／北越良寛禪師咏」 ・「雑詩」と総題。 	<ul style="list-style-type: none"> 五言七言有題詩51首 五言無題詩93首 五言七言有題詩17首 五言七言無題詩17首
<ul style="list-style-type: none"> ・「草堂集付録」 ／北越良寛禪師咏 鈴木隆造校 	<ul style="list-style-type: none"> 178首
収録作品総数	

第二次鈴木本の構成（国会本）

<ul style="list-style-type: none"> ・「草堂集序」 * 1 （末尾に「文化十三歲次丙子。文台鈴木弘撰」） ・「草堂集卷上」 ／北越良寛禪師咏 鈴木嘉校 	<ul style="list-style-type: none"> 五言七言有題詩（含無題詩）101首 及び「請受食文」と題する文章一篇
* 2	

・「草堂集卷下」
／北越良寛禪師咏
「雑詩」と総題。

五言七言の無題・有題詩138首 * 3

収録作品総数

239首

* 1 国会本は、文台序の前に蒲生重章撰の「良寛伝」を付す。

* 2 傍点部は、東郷本（東郷全集に依る）・鈴木宗久本（西郡全伝に依る）の記述により、仮に補った。

* 3 巻上の100と巻下の100は、同作品の異テキストとみるべきであるが、今は各々一首として数えておく。また、文章は収録作品総数に入れていない。

第一次鈴木本は、第二次鈴木本に所収の良寛晩年の作品を収録していないことから、序が書かれた文化十三年頃に成ったものと考えられる。付言や付録に見られる隆造（桐軒）の署名から、主たる編者は桐軒と推測される。上巻に五・七言の有題詩、下巻に五言の雑詩を収める。これは良寛自撰詩集と同じ構成である。付言の第一に「今從禪師之稿本。而不敢改題。且一首不漏。為貴其全也。」

（第一項 返り点ママ。以下同じ。）とあることにより、良寛自筆稿本が底本として用いられたことは確実である。但し、詩篇の排列は、自撰詩集とは異なる独自のものである。第一次鈴木本の付録は、付言に「稿本中塗抹所不取之三十首。是為付録。彼亦自口此亦自口。豈士直視之乎。以余見之。其格其詞。未必降於本集所口載。然為其非禪師之志為付録。」（第二項）とあり、底本の塗抹詩篇を抽出し、纏めたものであることがわかる。

第二次鈴木本は、第一次鈴木本を基本的には踏襲しながら、次の

ように再編集している。卷上・下の構成はそのままであるが、第一次鈴木本では付録として一旦別にした三十首を、第二次鈴木本では、有題詩、雑詩の別に、第一次鈴木本の本篇にそのまま継ぎ足している。また、第一次鈴木本の付言に「禪師の詩。不_レ尽_レ于此。有_レ酬_レ愚_レ之詩二首。有_レ酬_レ弟_レ弘_レ之詩二首。其他或_レ与人_レ或_レ答_レ人等。皆即席走_レ筆之作則_レ不_レ録。故愚亦_レ不_レ入_レ也。後來吟咏。待_レ積若干。而再上_レ梓則。半言一句皆採_レ之。以亦_レ為_レ付録。」(第五項)とあるとおり、鈴木氏や解良氏への贈答詩や、明らかに第一次鈴木本成立以後の作と知られる晩年の作品等が、第二次鈴木本には増補収録されている。ただし、これを付録とせず、上・下の各巻にまとめて挿入する形で、組み込んである。この結果、雑詩の部にも有題詩が混じるなど、第一次鈴木本に比べ、構成上統一を欠くこととなっている。序は文化十三年に文台が書いたものをほぼそのまま用いている。

第二次鈴木本の成立時期については、伝本には付されていないが、「嘉永二年乙酉五月」の日付のある、「良寛禪師草堂集並付言」と題する文台の序が、草稿として現存しており(『長善館草稿』所収)、この新たな序と付言が文台によって草された頃に、第二次鈴木本が完成したものとも思われる。但し、如何なる理由によるものか、この新たな序と付言は、流布本には付されていない。

第二次鈴木本の編集には桐野の息順亭(嘉)の参画が明示されている。また文台の働きに与るところも大きいであろう。

なお、国会本には、本行の字句の傍に、異テキストの表記がなされているが、これは鈴木文台の「良寛禪師草堂集序並附言 嘉永二年乙酉五月」中の次の条、「一 師詩不_レ尽_レ于此、此特取其手稿、(略)」「一 稿中間有_レ圈一二字、又有塗抹一兩句者、今皆収之、」

とあるのに相当するとも考えられる。傍記中、「文台曰此詩必有誤脱」といった注記が見られることも、これらが編集者らによって付されたことを推測させる。無論、この傍記の異テキストが、そのまま、底本たる良寛自筆稿本における推敲の為の書き込み字句に一致するわけではない。それは、第一次鈴木本のテスキトが、すでに編者による字句の取捨選択を経ており、第二次鈴木本のテスキト(本行)は、それをほぼそのまま踏襲しているからである。

六 草庵本・鈴木本のテスキト比較

草庵本と鈴木本の対校作業の結果を示したのが表一(八・九頁に掲げる)である。なお、それぞれの系統に於いて、既に伝本間の異同が存する。そのうち、誤写に起因する大部分の異同は、予め各系統内に於いて正した上で、両系統を対校した。また、各系統に於いて、いずれが正しいかの判断が困難な箇所は、表一から省いている。

東郷氏によれば、草庵本と鈴木本とは底本を異にしており、草庵本はいまだ推敲途上のテキスト、鈴木本は定稿というべきテキストを伝えていることになる。だが、今、草庵本・鈴木本を校合してみると、東郷説から想起されるほど異同箇所は多くない。実質的な違いは極めて小さいと言うべきである。但し、伝本によっては、誤写が甚だしいもの、或いは筆写者の改竄のあとが著しいものもある。東郷氏属目の『良寛法師草庵集』(糸魚川本)は前者に当たり、東郷氏説はこれによるものと推察されるのであるが、この伝本の正確さは例外的なものであり、これを以て直ちに草庵本の位置づけがなされるべきではない。

今、試みに、草庵本・鈴木本間の異同箇所をさらに、現存の自筆諸稿本と対校してみた(表一下半部に掲げる)。その結果、次のことが判明した。即ち、両系統間の異同字句のうち、草庵本のほうが現存自筆諸稿本と顕著な一致を示すのである。その割合は、全異同字句の五割を越える。次にそのいくつかを挙げる。

・ 庵108―鈴216及び庵120―鈴110の二詩篇について、草庵本では「垂楊」につくるところを鈴木本では「翠楊」につく。この箇所は自筆稿本では、全て「垂楊」または「垂柳」につくり、「翠」字が使われることはない。念のため、自筆稿本中のその他の詩篇について「楊・柳」字を検すると、それらの形容に「翠」ではなく「垂」字が用いられることで一貫している。

・ 庵137―鈴132の第六句は自筆諸稿本・草庵本ともに「硯氷乾」とするが、鈴木本のみ「氷」ではなく「水」としている。嚴寒の独宿の夜を詠んだこの詩の内容からして、「氷」から「水」へ推敲される可能性は低いと思われる。

・ 庵123―鈴111の第八句は自筆諸稿本・草庵本ともに「菟被纏十纏」とするが、鈴木本のみ字順が異なり、「菟被十纏纏」とする。「菟に十纏に纏はる」と訓むべきところで、文法上は後者の語順のほうが正しいであろう。しかしながら良寛自身は「纏十纏」で一貫していたと見られる。

・ 庵109―195の第八句「暮看杜陵花」、自筆稿本は四本とも「河陽」とし、最後の『草堂詩集』天巻において「杜陵」に改められている。草庵本は同じく「杜陵」とするが、鈴木本は「杜陽」としている。花に関わる地名として、ここは「河陽」か「杜陵」でなければならず、「杜陽」では意味がない。

・ 庵100―鈴154の第八句、天巻で「支那―神檀―真丹」と別案が書かれ「神檀」が抹消されている部分、草庵本は初案と同じく「支那」であるが、鈴木本は「真檀」(「香木の名」としている。ここは国名でなければならぬ)とあり、鈴木本は意味をなさない。

・ 庵84―鈴103の第二句、自筆諸稿本・草庵本とも皆「出世人」(出家、釈迦)につくるところ、鈴木本は「上世人」(大昔の人)となっている。仏道に志した若年時への回想という内容上、前者がふさわしいであろう。

このように見ていくと、両系統間の異同字句のうち、鈴木本の伝えるものは、良寛の手になる改変とは考えにくいものが多い。鈴木本の編者による誤認、或いは積極的な改変の結果がここに見られる異同に表れているのではないかと考えざるを得ない。

逆に草庵本のほうが現存自筆稿本と異なる場合も二割弱存する。例えば、庵86―鈴162の第五句、自筆諸稿本・鈴木本が「一彈激江海」につくるところ、草庵本のみ「激(すます)」ではなく「徹(とおる)」とする。これは草庵本の編者による底本の誤読の疑いがある。

草庵本・鈴木本間の異同字句の双方ともが、いずれかの自筆稿本と一致する場合もわずかながら存する。例えば、庵37―鈴2の第二十五句、草庵本は「聚首打大話」に作るところを鈴木本は「聚頭に作る。この箇所を自筆稿本において見ると、『草堂詩集』天巻は「聚頭」、同じく地巻は「聚首」としている。但し、このような対応関係に法則性は認められない。

ところで、第一次鈴木本の付言に次の二項がある。

一 詩中不可ニ一定者。如一枝鳥藤。一作三七尺鳥藤。道是盜賊襲三人家。一作盜賊徘徊百有余之類。不可枚舉矣。今取()と

所思_二彼善_一於此_一者。録之不_二必專從_一稿本_一。(第三項)

一 稿本中有_二兩字並書未_一定者。有_二三句並存者_一。如此之類。必斷以_二愚見_一。而奉_二其一_一。以_二刊本中不_一可並存_二也。他日禪師居_二於此_一。則按_二其所_一定之字句。曰_二某字某句當_一作_二某々_一。以_二拳_一諸弟弘所撰之行狀中。(第四項)

これによると、第一次鈴木本の編集の際の底本の扱いについては、「底本以外のテキスト(何を指すか明らかでないが、書幅等を指すか)をも採用し、必ずしも底本だけには拠らない。」「底本において別案が並記されている場合の字句の選択は編者の判断による。」ということであり、要するに、底本のテキストを忠実に再現するということに主眼があるわけではなかったことが知られる。鈴木本の伝えるテキストは編者の意向がかなり反映しており、それゆえ底本たる自筆稿本における推敲結果をそのまま伝えるものとはいえない可能性が高い。

一方、草庵本の編集態度については、鈴木本におけるごとき手かかりが今のところ得られていないのであるが、先に見た如き、現存自筆稿本との顕著な一致は、鈴木本に比して草庵本のほうが底本により忠実である可能性が高いと判断する一つの材料となる。

七 草庵本・鈴木本に対する貞心尼らの評価

鈴木本が草庵本に比べ重要視されている現状は先に述べた通りであるが、それでは、両者に対しての、良寛と同時代のあたりの評価はどうであっただろうか。

良寛遷化ののち、貞心尼から『良寛道人遺稿』の編者蔵雲に宛てた次の如き二通の書簡がある。一部を引用する。

『詩集一冊序文二通り、是は島崎へん澄と申す法師年頃禪師と親しく致し、人にて此度開板の事につきわざ／＼私方へ持参致され候まゝ差上げ御目かけ参らせ候。詩は同じことに候へど所々文じのあやまりあるを、学者の改め直したりとの事に候。序文も俗人の作にてさのみ取るべき所もなきやうに候へど……』

『先年禪師知音のもの共此詩を開板致す可しと相だん致し、鈴木氏も其仲間なりしにや序文も書き入れむといひたりしに人々うけあはず其事やみたりとの話、それゆゑ遍澄子綾瀬先生をたのみ書きてもらひしとの事に候へ共、是とともあまりよしとも思はれず……』
前の書簡で「学者」「俗人」といささか敬意を込めて呼ばれているのが鈴木本の編者鈴木氏に該当することは、あとの書簡と読み較べてみれば容易に推察できる。

弘化四年靖斎宛蔵雲書簡⁽¹⁵⁾によれば、牧江靖斎から「良寛禪師詩集」を貸与された蔵雲は、初めて良寛の真髓に接して感激し、良寛の詩を開版する企てを起こした。のちに刊行された『良寛道人遺稿』のテキストは草庵本に極めて近く(従って、先に見た如き、草庵本・鈴木本問の異同字句の大部分について、草庵本と「遺稿」とが一致する)、しかも所収作品の排列も、草庵本と酷似している。このことから、蔵雲が底本としたのは、草庵本の一伝本であったことが確実であり、それこそが靖斎から借りた「良寛禪師詩集」であったと考えられる。

蔵雲が良寛詩集を開版するに際して、貞心尼は、遍澄に託された詩集一冊を蔵雲に送った。「詩は同じことに候へど」即ち、「お送りする詩集に載る詩は、あなたのごらんになった詩集(草庵本)のものと同じですが」というところから、このとき送られた詩集は鈴木

木本であると考えられる。⁽¹⁶⁾ それについて「所々文じのあやまりあるを、学者の改め直したりとの事に候。序文も俗人の作にてさのみ取るべき所もなきやうに候へど」と述べているところに、貞心尼らの鈴木本に対する批判的な見方が表れている。

これを受けてか、藏雲も『良寛道人遺稿』の例言中で「此集管令某氏校訂之。改竄添削。大喪本真。今皆復原稿。不改一字。(傍点引用者)」と述べている。「某氏」が鈴木氏であり、「原稿」が草庵本の一伝本であることはやはり言うまでもない。

貞心尼や藏雲、藏雲らの鈴木本に対する批判は、僧ではなく俗人の手によって良寛の詩が扱われることへの反感に根ざすところが小さくないように思われる。しかしながら、彼らの見方は、先の考察結果と重なりあうのである。

ここまで、専ら両系統の異同の側面を見てきたが、逆にいえば、両本の異同は全編中、表一に見たような箇所のみ過ぎないともいえる。流布本系テキストを伝える良寛自筆稿本は、残念ながら現在までのところ所在不明であるが、流布本が二種類つくられ、しかもそのひとつがもうひとつを底本としたのではなしに、二つともがそれぞれに(恐らく同一の)自筆稿本に基づいて作られたものであるということは、我々にとって誠に幸いであった。二系統のテキストが殆ど一致するということは、少なくともその一致した部分のテキストの信頼性の高さがある程度保証するものだからである。

おわりに

流布本系テキストを伝える二系統の流布本、草庵本と鈴木本の成

立ちと、両者の関係について考察した。従来その存在が軽視されてきた草庵本は、むしろ鈴木本に比して、底本たる良寛自筆稿本のテキストを、より忠実に伝えている可能性があることが明らかになった。両系統のテキストを相補させることで、未だ所在が確認されていない底本のテキストの復元はある程度可能となろう。しかしながら草庵本の編集のいきさつについては不明の点を多々残している。なお、課題としなければならない。

註

(1) その他に、新鴻の若き儒者、巖田洲尾は、良寛詩百余首の選集『雲山余韻』の刊行を計画していたが、洲尾の死によって、実現しなかったらしい由、第一次鈴木本の付言に見える。

(2) 「良寛詩集系統序論(中)―貫華系テキスト・流布本系テキストと『草堂詩集』との関係―」『国文学攷』一一九号 平成三年三月

(3) 東郷豊治編著『良寛全集 下』(昭和三十四年)解説十一頁

(4) 鈴木本は従本「文台本」とも呼ばれている。確かに鈴木文台の働きはこの詩集の完成に大きく与るものであったが、編集に着手したのは文台の兄桐軒であり、また、伝本には「順亭(桐軒の息)校」と記されていることからして、文台の名のみを冠するのは適切でないと考え、三者に共通の姓をもって「伝本の総称」とした。一方、草庵本についても、鈴木本と同様に編者の名をもって呼称すべきであるが、こ

の詩集の編者や編集の経過に関しては殆ど未詳である。従って、不統一ではあるが、従来から一系統の写本名として著名な「草庵集」の名に依って呼称することとした。

- (5) 相馬御風『良寛百考』（昭和十年）に『国上沙門良寛詠歌草庵集』なる和歌集についての記事がある。それによるとこの本は『文政五壬午孟春写良寛作詩』と題する一本と共に、もと小池家に蔵されていたものという。『国書総目録』にも同書についての記載があるが、「（国上沙門）良寛詠歌」（「類）和歌」で立項したうえで、「草庵集と合一冊」と記述し、『草庵集』を別本として扱っている。和歌集のほうは現在大阪市立大学図書館に蔵されるが、その表紙には、「国上沙門良寛詠歌／草庵集」の如く、表紙左肩に二行に分けて題が記されている。この点について横山英氏は「国上沙門良寛詠歌」がこの本の標題で、一語にあった筈の詩集が「草庵集」であったのではないかと考えられる」（『未刊良寛歌集五種』昭和五十五年 解説五頁）とされる。

- (6) 草庵本諸伝本を校合してみると、巻町本のみ認められる異同も若干存し、巻町本が必ずしも現存諸伝本の祖本そのものではないことが知られる。

- (7) 東郷豊治氏は、草庵集の編者を、晩年の良寛の法弟であった遍澄であると推定される（『良寛全集 下』解説十四頁）。だが、草庵本は文化十二年春には成立しており、この年、遍澄（幼名は市内といわれる）は十五歳。彼が良寛を五合庵に訪ね、剃髪して遍澄と名乗るのは翌文化十三年の

事である。

- (8) 東郷編著『良寛全集 上』「補遺」には、『草庵集』を「典拠」とする詩が収められている。これらの作品のうち、東郷氏嚆目の二本の「草庵集」のうちの一の『良寛法師草庵集』△糸魚川本✓に収録されているのは一首のみであり、ほかはもう一本の「草庵集」の伝本である『良寛師草庵集』△関西某氏蔵本✓所収のものによったと考えられる。大幅な増補を施している『良寛上人詩集』△幸田本✓には、右の作品のほとんどを増補の部分に収めている。従って『良寛師草庵集』は『良寛上人詩集』と殆ど内容を同じくする増補本であったと推測される。

- (9) 良寛自筆稿本の作品排列は内容本位のものである。詳しくは別稿で述べたい。

- (10) 伝本中、「草堂集」の題下に「又名草庵集」と注記するものがあるが、「草庵集」と題した鈴木本の伝本、或いは良寛自筆稿本は伝存していない。

- (11) 鈴木宗久氏は鈴木桐軒の孫に当たる。

- (12) 「長谷川氏」は、鈴木文台「跋良寛上人書後」文中に見える「長谷川」と同一か、関係のある人物と推測される。鈴木宗久本、長谷川氏蔵本とも、編者に極めて近い人の手になる、重要な伝本といえる。

- (13) 鈴木宗久本を翻刻した西郡「全伝」の校註の多くが国会本の傍記と一致することから、鈴木宗久本にも国会本と同様の傍記があったと推測される。

- (14) 大島花東『良寛全集』（昭和三十三年）七三四頁

(15) 相馬御風『良寛百考』一六四頁

(16) 藏雲が草庵本を底本としながら、鈴木本をも参照していることは、鈴木本のみ収録されている詩篇数首（「贈鈴木隆造」など）が『良寛道人遺稿』に収録されていることから、明らかである。

付記 諸伝本の調査については、渡辺秀英先生、谷川敏朗先生、糸魚川市歴史民俗資料館の田村晴久先生をはじめ、多くの方々に御高配、御助言を賜った。また成稿に際しては、米谷巖先生に懇切な御指導を賜った。ここに記して甚深の謝意を申し上げます。

— 広島大学文学部助手 —